

書物奉行と紅葉山文庫① 鈴木白藤

氏家幹人

森潤三郎と鈴木白藤

紅葉山文庫の書物奉行を務めた鈴木白藤（一七六七—一八五一）名は成恭・恭・供。通称は岩次郎。字は士敬。白藤は号だが、鈴木白藤の名で知られているので、以下本稿でも白藤と呼ぶことにする）について述べるに当たって、第一にひもとくべきは、森鷗外の弟、森潤三郎が著した『紅葉山文庫と書物奉行』（一九三三年刊）であろう。

本稿は、まず森潤三郎の経歴と業績そして白藤に関する研究の紹介から始めたい。なお以下の記述は、森富「森潤三郎小伝」（『鷗外』第七十七号所収 二〇〇五年）、「森家三兄弟—鷗外と二人の弟—」（文京区立森鷗外記念館コレクション展解説 二〇一七年）ほかに依拠している。ちなみに森富氏は鷗外の長男於兔の次男で、潤三郎の没後、同人の「選定家督相続人」となっている。

潤三郎は、明治十二年（一八七九）四月十五日、森静男、峰子の三男として、南葛飾郡向島小梅村（現在の東京都墨田区のうち）で生まれた。長兄の林太郎（鷗外）は十八歳（数え年、以下同）、次兄の篤次郎（のちに三木竹二の筆名で劇評家として活躍する）は十三歳。姉のキミ（のちに解剖学者・人類学者として知られる小金井良精の妻となる。小金井喜美子）は十歳だった。

明治三十四年、二十三歳で東京専門学校（翌年、早稲田大学と改称）史

学科に入学。在学中の明治三十七年、春陽堂から『朝鮮年表』を出版。翌三十八年に早稲田大学を卒業したが、卒業試験の成績が悪く、文部省検定免状（教員免状）が得られなかった。翌三十九年、友人の勧めで東京帝国大学史料編纂掛に嘱託として奉職、大日本史料第六編の調査に従事した。

『朝鮮年表』について、姉の小金井喜美子が後年こう記している。「潤三郎が『朝鮮年表』という本を作ったのは、よほど前のことです。朝鮮に行きたい希望でしたが、生来虚弱なので、お兄様からお許しが出ませんでした」（『鷗外の思い出』所収「弟」）。潤三郎は朝鮮の歴史にも興味を持っていた。

明治四十二年（一九〇九）十二月頃、上田敏（京都帝国大学文学部教授）の世話で、京都府立京都図書館に赴任（三十一歳）。初めは書記、のちに司書に昇進し、大正六年（一九一七）まで在職し、『京都叢書』の編輯や「大正天皇即位御大典記念特別企画 歴代宸翰展拝会」の委員などを務めた。

また勤務の傍ら、古書古文書を蒐集し、大正三年から京都武徳会の機関紙『武乃世界』に「兵書解題」を連載。大正四年四月から『ほんや』（京都の古書店細川開益堂発行の雑誌）の編集を担当するとともに同誌にほぼ毎月寄稿。うち「近藤正斎及びその交友の書簡」は、近藤正斎（重蔵）の紅葉山文庫修復に関する献言の草稿を扱った論考で、この頃から『紅葉山文庫と書物奉行』につながる調査が始まっていた様子がうかがえる。

京都図書館での勤務は、潤三郎の古書古文書研究にとってきわめて有意

義なものだったが（同時に兄鷗外にとつても有益で、鷗外は潤三郎に自身の小説に関わる史料調査を依頼している）、思いがけない事情で京都を去ることになる。潤三郎は図書館長の湯浅吉郎が企画、主催していた珍書刊行会で実務を担当していたが、同会が復刻した人情本が出版法違反を疑われた結果、潤三郎は大正六年三月三十日付で辞表を提出し、退職したのである。その経緯は高梨章「森潤三郎・森鷗外と」京都図書館淫書刊行事件②『鷗外』第六十八号（二〇〇一年）に詳しい。

大正六年十月、三十九歳で東京に戻った潤三郎は、内田魯庵・坪井正五郎・三村清三郎ら集古会の会員と交友し、江戸文化の研究を深めた。

翌七年三月、兄鷗外の世話であろう、東京帝国大学伝染病研究所図書室に就職。歴史考証学者として本格的な活動を始め、中断していた紅葉山文庫と書物奉行の調査も再開した。『紅葉山文庫と書物奉行』の原稿について、潤三郎は雑誌『明星』（鷗外追悼号）に掲載された「亡き兄の思出」の中で、四度も稿を改めてその摘要を鷗外に見せたところ、「兄は非常に喜んで、大分元気は衰へたやうに見受けましたが、それを読んで文章などを直してくれた」と書いている。しかし思うように史料が集まらなかったため執筆はかどらず、結局完成した『紅葉山文庫と書物奉行』を鷗外に見せることはできなかった。

大正十一年（一九二二）七月九日、鷗外没。享年六十一。四十四歳の潤三郎は、葬儀の直後高熱を発し、難聴になる。姉の喜美子によれば、「四、五日を夢中で過して、ようよう全快しましたもの、その時から耳は全然聞えなくなりまし。精神上の打撃からだ」と医者はいわれます（『鷗外の思出』）。喜美子によれば、潤三郎の「耳の遠い」のは昔からだったが、敬愛する兄の死による精神的な打撃でまったく聴こえなくなったようだ。にもかかわらず潤三郎はめげなかった。再び『鷗外の思出』から。「そ

れでも端の者が思うほど苦にもせず、元気に書き物をしたり、調べ物をしたりしておりました。いつも紙と鉛筆とを懐に持っていて、それを出しては人に書かせ、自分は口で返事をするのでした」。

昭和三年（一九二八）、『紅葉山文庫と書物奉行』執筆の進捗状況を「紅葉山文庫の書目編纂事業」（『書物の趣味』三号）で発表。書物奉行九十人のうち、任命前後の経歴や葬地が不明の者十四人、履歴や系譜に不明な点がある者十一人とある。

昭和八年（一九三三）七月、『紅葉山文庫と書物奉行』が昭和書房から出版。翌月、医史学会から『多紀氏の事蹟』が出版された。後者は江戸幕府の奥医師（漢方）多紀氏代々の経歴と事蹟をまとめた、当時としては唯一の文献である。この年、潤三郎は五十五歳になっていた。

『紅葉山文庫と書物奉行』の出版について、小金井喜美子は次のように記している（『鷗外の思出』）。同書成立の経緯や内容を簡潔に述べているので、すこし長いを紹介したい。

これは東照宮三百年祭記念会の補助に成ったので、昭和八年に出版せられたのですが、約八百頁もあって、幕府の紅葉山の変遷から、御書物奉行九十人の伝記が集めてあり、奉行の伝記に関しては、雑書の類まで広く漁った上に、その墓所をも一々踏査したのでした。京都府立図書館在職中に筆を執り始めてから、完成までに二十年の歳月を経、その間に稿を改めることが五回に及びました。自分が図書館に勤めていましたし、お兄様も図書頭をなすつたりしたので、自然そうした方面に興味を持ったのでしよう。

「東照宮三百年祭記念会」の補助で出版された経緯については、潤三

郎自身の同書「緒言」に「昭和四年四月文学博士三宅米吉氏の推薦により、東照宮三百年祭記念会より研究費の補助を受け」とある。三宅米吉（一八六〇—一九二九）は、帝室博物館総長や東京文理科大学初代学長などを務めた教育者、歴史学者である。

京都図書館時代に起筆したことについて、潤三郎は同書「緒言」で「予職を図書館に奉ずるに及び微力自ら揣らず、紅葉山文庫の沿革と書物奉行の事蹟を調査せんと志し、大正改元の瑞運に会せし記念の事業として、仮に秘閣年表と題して資料の蒐集に着手せり。然れども当時任に京師に在りしを以て材料に乏しく、僅に京都帝国大学附属図書館、府立京都図書館に蔵する二三の書を参考として大綱を記し、三年にして一応筆を止めたり」と述べている。

それにしても、潤三郎はなぜ紅葉山文庫と書物奉行の調査に半生を費やしたのか。動機について、姉の小金井喜美子は、潤三郎自身が図書館に勤務していたうえ、尊敬する兄鷗外が図書館（宮内省図書館の長官。鷗外は大正六年十二月に帝室博物館総長兼図書館頭に任ぜられた）を務めるなど、古書や文庫（図書館）に深い興味を抱いていた影響と推察している。

ほかに高梨章氏が、前掲「森潤三郎・森鷗外と「京都図書館淫書刊行事件」」で、『紅葉山文庫と書物奉行』『多紀氏の事蹟』の両書について、紅葉山文庫と医学館（多紀氏が主宰した漢方研究と教育のための施設）を取り上げた「明治の世の敗者の側の文化的研究でもあった」と述べていることにも触れておこう。

『紅葉山文庫と書物奉行』は、なにしろ特殊なテーマで堅い内容のものだけに当初販売が懸念されたが、刊行されると予想外の売れ行きで、短期間で初版は売り切れたという。本の好評を心から喜んだ人の中に、集古会で初めて潤三郎と顔を合わせた森銑三（一八九五—一九八五）がいた。森

銑三は昭和八年十月号の『書物展望』に掲載された「森潤三郎著紅葉山文庫と書物奉行」で、潤三郎の調査、執筆の苦心を克明に伝えている（『森銑三著作集』続編第十二巻所収）。

銑三曰く。世の中には本づくり（「作書の術」）に長じた学者がいて、そのような手にかかる、「いかなる大問題も、またいかなる難問題も、苦もなく処理されて、書物の一二冊位は、ばたばたと出来てしまふ」。しかし「わが森さん（氏家註・森潤三郎）の如きは、その点に於ては明かに書物を作ることの拙い人である」。綿密な調査と推敲彫琢の末に書物を著すのではなく、安直に生産する時流に乗った学者を痛烈に皮肉ったうえで、銑三はそれとは対照的な潤三郎の姿勢（そして熱意）を絶賛している。

この書は殆ど森さんの半生を費して成ったのであった。この書の貴き所以もまたそこにある。森さんは、事物の研究調査に当って、いかなる労をも厭はぬ人である。労を厭はぬくらゐは当然ではないかといふ人があるならば、私は敢へて反詰しよう。百人近い御書物奉行の墓を、君は実際に一々踏査して廻るだけの熱意を有するかと。森さんは、それを当然の仕事としてされてゐるのである。それもただ一通り見て廻られたのみではない。所在不明の墓石を丹念に搜索し、過去牒を調べ、なほ不明の事実を寺へ問合せ、回答を得たりされてゐるのである。寺が市内から旧郡部へ移転したために、改めて踏査に赴かれてゐるのも一再に止まらない。さうした並々ならぬ苦心の末にこの『紅葉山文庫と書物奉行』は成つたのである。

昭和十九年（一九四四）四月六日の朝、電話で潤三郎が脳溢血で昏睡状態であると知った喜美子は、さっそく駆け付けたが、弟はすでにこの世の

人ではなかった。潤三郎の書齋に目をやると、「蔵書が書棚に溢れ、また昔からの趣味で、あらゆる物を切抜いて貼附けたのが山を成しています」（『鷗外の思い出』。享年六十六。森潤三郎は最期まで調査研究の人だった。

潤三郎が切り抜いたのは書物奉行に関する記事だけではない。鷗外の没後、『鷗外全集』の編集委員として編集と校正に携わったこともあり、喜美子によれば、鷗外に関する記事を細大漏らさず書き抜いたり切り抜いたりしていたという（『鷗外の思い出』）。その成果が昭和九年に昭和書房から出版された『鷗外森林太郎』である。なお潤三郎の論文等の著述については、森富「森潤三郎著作補遺」（『鷗外』第七十九号所収二〇〇六年）に詳しい。

「蔵書家白藤として知られたる書物奉行鈴木岩次郎成恭の事蹟」から『紅葉山文庫と書物奉行』へ

ところで森銑三は「二三年前」（昭和五、六年）集古会で面識を得る前から潤三郎の名前を知っていた（前掲「森潤三郎著紅葉山文庫と書物奉行」）。潤三郎が鷗外の作品に登場する渋江抽斎、伊沢蘭軒、北条霞亭ら学者の墳墓を踏査していたのを承知していたからであり、それにもまして潤三郎が大正十四年（一九二五）に『史学』に発表した鈴木白藤に関する詳細な研究を読んでいたからだった。

研究のタイトルは「蔵書家白藤として知られたる書物奉行鈴木岩次郎成恭の事蹟」。かねてから勝田半斎（書物奉行を務めた旗本）とその周辺の人々の詩作について研究していた銑三は、勝田ほか多くの学者等と交友があった白藤の活動にも関心を抱き、それだけに潤三郎の白藤研究に注目したのである。銑三はこう述べている。「次いで雑誌『史学』に御書物奉行の一

人鈴木白藤についての精しい研究を発表されてゐるのを読むに及んで、森さんの名は未知の私にも親しく感ぜられるやうになつてゐた。殊にその白藤研究はしばしば披閲して益を請けてゐた。それだけ私は、集古会の席上でも、初めて会つたといふ感じがしなかつた」。潤三郎の研究が掲載されたのは三田史学会の『史学』四巻一号で、大正十四年二月に刊行された。

潤三郎は研究の抜き刷りを同年二月二十七日に帝國図書館に寄贈。この研究は現在、国立国会図書館デジタルコレクションの一点として容易に閲覧できる。全四十八頁。ほかに口絵として『楓山書倉邸抄』の表紙と第一頁の写真が添えられている。『楓山書倉邸抄』は白藤が「文化十三年（一八一六）の貴重書整理に関する建言数種を手写したものである」（福井保『紅葉山文庫』一九八〇年刊）。同研究の「目次」は左の通り。

緒言

- 一、成恭の履歴と父祖及び裔孫
 - 二、免職の原因
 - 三、成恭の年齢
 - 四、成恭の性行
 - 五、成恭の住居
 - 六、成恭及び近親の墓碑
 - 七、成恭の編著及び蔵書
 - 八、成恭の撰文を刻める碑
 - 九、成恭の交友
 - 十、成恭の子成夔の事蹟とその著書附孫成虎の事蹟
- 附 鈴木成恭近親交友略年譜

参考書目

右の「緒言」に「大正元年予は江戸幕府時代の紅葉山文庫の沿革と、その主管者書物奉行の事蹟とを研究せんことを企図し、関係図書を渉獵するに当り」とあるように、潤三郎が紅葉山文庫の沿革と歴代書物奉行の事蹟の調査を始めたのは大正元年（一九一二）の京都時代だったが、当時は鈴木白藤についてほとんど知られていなかった。潤三郎は『武鑑』に書物奉行として記載されている「鈴木岩次郎」が白藤と同一人物である事実すら知らず、『一話一言』『香亭雅談』などの記述を対比してようやく「鈴木岩次郎の白藤ならざるや」と推測したものの、確信を得るに至らなかったとも述べている。武田信賢編『墓所集覧』に白藤の名と通称が成義勘十郎（いづれも白藤の父のもの）と記されていたことも、潤三郎を迷わせた。

しかし、白藤の娘婿の古賀煜（通称小太郎、伺庵の号で知られる）が、文政元年（一八一八）、白藤が父成義の墓石を改修した際に撰した碑文の拓本を手に入れたことで疑念は氷解した（鈴木岩次郎すなわち白藤である）と判明）。その後、鈴木家の菩提寺で鈴木家累代の墓を拝すとともに過去帳を閲覧し、さらに同寺の住職の好意で「鈴木家に伝来せる書類の」の精査を許可され、研究は一気に加速した。「書類」とは、「由緒書」「先祖書、同姓書付、宗門改証文」（天保十五年）親類書、遠類書」（嘉永七年）親類書、遠類書」（万延二年）親類書、遠類書」そして「白藤書屋蔵書目」である。

『史学』掲載の白藤研究から八年余を経て出版された『紅葉山文庫と書物奉行』で、白藤の記事は大幅に増補された。その後のたゆまぬ調査研究の結果である。同書は「奉行伝記集成」として九十人の歴代書物奉行それぞれの閲歴と業績を挙げているが、近藤重蔵には百十三頁を費やしている。それにもまして白藤に関する記述は、実に百二十二頁に及ぶ。ちなみ

に天文方兼書物奉行の高橋作左衛門景保が十六頁。白藤と同僚だった時期がある他の五人の奉行も三頁から四頁に止まり、石川良左衛門通睦に至っては、「弘化四年七月二十八日大坂弓矢奉行より書物奉行となり、嘉永三年四月八日林奉行に転ず」とだけ、わずか一行で済まされている。たんに資料不足というだけではないだろう。紅葉山奉行と書物奉行に関する潤三郎の研究の中で、鈴木白藤と近藤重蔵がいかに大きな存在だったか察せられる。

「奉行伝記集成」中「鈴木岩次郎成恭」の小項目は、一系譜、官歴、家伝、年齢、性行、免職の原因、住所、成恭及び近親の墓碑、成恭の編著及び蔵書、成恭の詩文、成恭の文章、成恭の小説的作文、成恭の談、師友、同僚。

それぞれについて『史学』掲載の研究に加筆され、とりわけ著述と交友に関する増補が顕著である。以下、同書に採録された記事を中心に、白藤の官歴、性行、免職の原因を振り返ってみよう。

官歴

鈴木家伝来の「由緒書」等によれば、鈴木家の官歴（幕臣としての履歴）は、初代鈴木與四右衛門某が寛永十三年（一六三六）に徒士に召し抱えられたのにさかのぼる。初代は寛文八年（一六六八）、百俵五人扶持で没した。二代目の與四右衛門は徒士、徒目付、闕所奉行などを経て、宝永三年（一七〇六）に没した。三代目の孫兵衛某は広敷添番、四代孫兵衛成澄は広敷添番、天守番を務めた。五代目が白藤の父の勘十郎成義で、広敷添番を病で退いたのち明和六年（一七六九）八月に没した。広敷添番も天守番も御目見以下である。

すなわち鈴木白藤（岩次郎成恭）は六代目で、父の没後、明和六年十一

月六日、家督継承を許されて小普請入りした。白藤は明和四年（一七六七）九月生まれだから数えでわずか三歳だったが、幕府には九歳と届けられ（いわゆる官年。あまり幼いと相続が許可されないおそれがあつたためこのような年齢の上乗せが慣習化していた）、このため以後幕府に提出した由緒書等では六歳加算されることになる。

天明八年（一七八八）七月二十六日に天守番となり、寛政十二年（一八〇〇）三月晦日に学問所勤番組頭（御目見以上）を拝命。文化九年（一八一二）十一月二十四日、四十六歳（官年では五十二歳）で書物奉行を拝命し、「永々御目見以上」を仰せつけられた。しかし文政四年（一八二二）十二月二十四日、「思召有之」によって職を解かれ（「御役御免」）、小普請入り。嘉永四年（一八五二）十二月六日に没している。享年八十五（官年九十一歳）。

性行

白藤の人柄や習性をもっとも生き活きと伝えているのは、浅野梅堂（名は長祚。一八一六―一八〇〇）が維新後に綴った随筆『寒檠瓊綴』（寒々とした机に向かい往時の細々とした事を綴る、という意味）だろう。梅堂は浦賀奉行、京都町奉行、江戸北町奉行などを歴任した旗本で、書画の鑑定でも知られる知識人だった。長文なので原文を挟みながら意識で要約したい（なお『寒檠瓊綴』の全編は『続日本随筆大成』第三巻に収録されている）。

「白藤鈴木悋、軀幹魁梧老テ尚健啖、馬將軍ノ風アリ」（白藤は身体が大きく、老いてなお健啖、馬將軍（未詳）の風があつた）。しかも「斤斗ヲ能セリ」（宙返りが得意）。和漢の歴史に詳しく、治乱興廢の

故事や忠臣勇将の話をさせたら、話題は尽きなかった。正史だけではない。「稗史野乘」（物語小説の類や雑史）も好んだ。多くの古書を蔵し、蔵書は「雑劇院本」（歌舞伎や人形浄瑠璃などの戯曲）に至るまでさまざまなジャンルに及んでいた。のみならず「書ヲ鈔スル敏速ニシテ一日数十紙ヲ写ス」（書物を写すのが速やかで、一日に数十紙も写してしまふほど）。「温史」（『資治通鑑』を「全部自鈔ス」（全二百四十九巻を自身で書き写した）という。

老いてなお強靱な身体を保ち、精神的に書物を蒐集かつ自写した白藤。しかし白藤の特筆すべき「性行」はそれだけではなかった。『寒檠瓊綴』の記述を続けよう。

「性儉嗇、尺牘ノ紙ハ菓子ノ包紙ノ類ヲシハヲ杼シテ用」（白藤はたいそう儉約家で、手紙は菓子の包み紙を伸ばしたものに書き）、「請取書ハ明リ障子ヲ切張セシ古紙ヲ用ヒ」（請取書は古い障子紙の反古に書く）という具合だった。来客の名刺の札も有効に活用。札は机の下に挟み、人に書物を貸すときは、その札の裏に書名を記して壁に貼り、「出入ノ証トス」（書物の出納簿として利用した）。人と話しているときも（手を休めず）、いつも反古の切れ端で紙縫（こより）を作っていた。白藤は文化十三年から毎年一冊「夢蕉」と題する随筆を綴っていたが、その用紙もすべて書状の封紙、年玉の上包紙などを裏返しにしたもので、短ければ丁寧に継ぎ足した。

だからといって白藤は吝嗇（ケチ）だったわけではないと梅堂は言う。「人ニ物ヲ贈ルナトハ腆厚ナリ」。人に物を贈るときは出費を惜しまなかつ

た。「己レ而已齋ナルニ非ス、人ニモ耗失ナカラントセルナリ」。自身が損をするのを嫌っただけでなく、人が損をしないよう心配りをしたというのである。

人並外れた儉約家だった白藤について、旧旗本の大谷木醇堂（一八三八—一九七）が明治の半ばに著した『醇堂叢稿』（国会国会図書館蔵）に、次のような逸事が見える。

書物奉行の近藤重蔵は、借金が金千両に達したとき、これはめでたいと祝賀の宴を催し、三度にわたって客に振舞った。大谷木家の隣人で鉄炮方の田付主計もやはり負債千両で祝宴を開いた。一方、書物奉行を務めた鈴木岩次郎の場合は、自分が吝嗇であると世間に知れ渡ったことを祝して宴を開いたという（亦鈴木岩次郎（白桃山人ト号ス御書物奉行ヲ勤仕ス）ハ其吝嗇ナルヲ世ニアマネク知ラレタルノ嬉シキトテ饗宴ヲ設ケタリ）。

吝嗇と取り沙汰されて怒るどころか、みずからこれを祝した白藤は、ユーモアのセンスと度量の広さを兼ね備えた江戸っ子知識人だったと言えるかもしれない。

白藤が筆まめで多くの書物を書写したことは、同じく旧幕臣の中根淑が著した『香亭雅談』（一八八六年刊）にも記されている。すなわち「鈴木白藤蔵書に富み、また性写字を好む。およそ見るところの良書、手写せざるはなし。往時、楓山書庫、抄本の木に上さざるもの多く、世人の得て見るなし。白藤晩に秘書監たり。日夜その好むところに従事し、数年を出ずして鈔書積むこと山のごとし」（原漢文）。

白藤は書物奉行（「秘書監」）時代、紅葉山文庫（「楓山書庫」）の蔵書で

未刊行のため世人の目にふれない文献を精力的に筆写し、数年にして山のような書写本を家に持ち帰ったというのである。『香亭雅談』によれば、これらの書写本は、他の蔵書とともに白藤の子の桃野、孫の竹圃によって保管されていたが、明治五年（一八七二）の火災で焼失したという。

免職の原因

文政四年（一八二一）十二月二十四日、五十五歳の白藤は書物奉行を突然解任され無役の小普請となった。白藤「免職の原因」を、潤三郎は「何等か当局者の忌諱に触るる行為あるに因るものなり」とし、山崎美成（一七九六—一八五六）『海録』所収の詩「鈴木白藤免秘書監入散官贈」（秘書監は書物奉行、散官は小普請）に「窺見蘭台中秘書 風流罪過思何如」とあるのを引き、前掲の『香亭雅談』の記事とあわせて、「秘密主義を尙ぶ徳川時代にありて、紅葉山文庫の秘書を筆に任せて謄写せしを以て、貶黜せられしにあらざる歟」と推測している。

一方で、潤三郎は大田南畝の狂歌「いかほどに波のぬれぎぬきするとももとよりかたき岩次郎殿」を紹介し、また『海録』の詩中に「風流罪過」とあることから「或は筆禍の他に何かあらぬ冤罪を受けたる如くにも想像せらる」とも述べている。白藤の子の桃野の随筆『無何有郷』によれば、免職の報を伝え聞いて、白藤を慰めに訪れる人もすくなくなかったという（「家翁左遷の時人人訪ひ来りて弔慰する時」）。白藤は知人や友人に咎められたのではなく同情されていた。

福井保『紅葉山文庫』もまた、本間游清（一七七六—一八五〇）の随筆『耳敏川』から「官庫ならでなき本は、御書物方鈴木岩二郎といふ人によりて書ぬきもらふといへり」の一節を引いて、潤三郎の推測を補強する

とともに、書物奉行任命の際の誓約書に紅葉山文庫の蔵書の貸し出しや写し取りを禁じた条項があるのを挙げ、「白藤が免職になったのは、この条項に違反したためであろうと伝えられている」と記している。

参考までに当館所蔵「多門櫓文書」のうちから書物奉行の誓約書を挙げておこう。すなわち石川次左衛門（政勝）が慶応二年（一八六六）三月二十一日に書物奉行を拝命したのち、四月二十一日に提出した誓約書（「起証文前書」 請求番号 多一二三五七）の第三条に「御書物他所江借申間敷候 尤写取申間敷事」とある。

白藤の免職は幕府の記録にどのように記されているだろうか。当館所蔵『年録』（請求番号 一六四〇〇五二）の、文政四年十二月二十四日の記事を見ると。

御座間

御書物奉行

鈴木岩次郎

右思召有之御役御免小普請入被仰付旨

於御右筆部屋縁頼 下野守申渡之 若年寄中

侍座

「思召有之」（おぼしめしこれあり）は、明確な理由を挙げずに將軍の意思で免職等が申し渡される場合に用いられた常套句。幕府奥儒者で騎兵奉行や外国奉行を歴任し、維新後はジャーナリストとして活躍した成島柳北（一八三七―一八四四）は、明治十四年（一八八二）五月二日の『読売新聞』に「思召の説」と題してこう書いている（乾照夫編『読売雑譚集』所収）。「旧幕の時代を回顧するに、將軍の威権は実に比倫無きものにて有りき。況てまし

其の臣下に行はるゝ権力は鬼神にも勝れる程にて、今試みに其の一を挙げれば、其の臣下を罰する折、其の罪を指さずして思召有之御役御免、或は思召に依て何を申付る等の事、常に有りしなり。扱其思召と云ふは何ぞといふに、全く將軍の意中に出づる事を申す也。はたしてこの通りならば、白藤の行状を報告された將軍（十一代家齊）が免職を命じたことになる。いずれにしろ具体的な罪状はあきらかにされなかった。

紅葉山文庫の業務日誌である『御書物方日記』ではどうか。

『紅葉山文庫と書物奉行』執筆当時、『御書物方日記』の存在はまだ知られていなかった。日記は宝永三年（一七〇六）から安政四年（一八五七）までの分二百二十五冊が当館に現存し、天保年間以降に欠脱が多いとはいえ、紅葉山文庫の蔵書や運営、人事等に関する基本資料にほかならない。福井保『紅葉山文庫』によれば、その存在は福井が内閣文庫在職中の昭和三十一年（一九五六）の夏に「発見」されたという（偶然、書庫の中でこの日記が紅葉山文庫のそれであることに気づいた）。

文政四年の『御書物方日記』で白藤免職の経緯を要約してみよう。

十二月二十三日夜、高橋作左衛門（書物奉行）宅に、堀田撰津守（若年寄）から出された書付が到来する。内容は、翌二十四日四時（午前十時頃）に鈴木岩次郎（書物奉行）を「御用之儀」があるので御城（御殿）に参上させるようにというものだった。

十二月二十四日、白藤は「病氣」で、名代として同じく書物奉行の川勝頼母が御城に参上。御右筆部屋縁頼において、「思召有之候二付小普請入」を仰せつけられた。

やはり免職の理由は記されていないが、気になる記述もある。それは翌

二十五日、書物同心の江西文蔵とその息子でやはり書物同心の江西清太郎が「場所不相応」（役目に相応しからぬ行為があった）という理由で罰せられていることだ。文蔵は「小普請入押込」、清太郎は「御切米御扶持方差上 勤差免押込」。免職のうえ謹慎という重い処分である（清太郎の場合にはさらに俸給返上も加わる）。同日、処分が下る直前に、文蔵は親類の願いを添えて（「親類添願」）、「小普請入願書」を差し出してはいたが、受理されなかった（「差戻候」）。処分の内容とあわせて犯した罪の重さが察せられるが、どのような罪だったかは記されていない。

江西文蔵は、寛政九年（一七九七）五月十三日に「世話役」（書物同心の中間管理職的ポスト）に任ぜられた古参で、文化五年（一八〇八）には『乾隆四庫全書無板本』（『四庫全書』の写本。全二百七十六冊）の各冊に検索を容易にするための外題（所収書物のタイトル）を付した功績で金三百疋を下されている。経験と学識を兼備した書物同心だった。清太郎は文化七年（一八一〇）に書物方に仮採用（「仮抱入」）となり、その後昇格。親子で書物同心を務めていた。父子の処分のタイミングから、白藤免職との深い関わりが推測されるのである。白藤は江西父子と「共謀」して、紅葉山文蔵蔵書の書写とその持ち出しを行ったのだろうか。真相はあきらかでない。

ところで書物奉行が紅葉山文蔵の蔵書を書写するという行為は、それほど重大な罪だったのだろうか。たしかに誓詞では禁じられていたが、実際にはしばしば行われていたのではないか。とりわけ研究熱心な学者肌の者や珍籍奇書に目がない愛好家、あるいは漢籍の善本に心を奪われた愛書家が奉行に任命された場合には。

上原久『高橋景保の研究』（一九七七年刊）に、天文方の高橋作左衛門景保（一七八五—一八二九）が文化十一年（一八一四）二月三日に書物奉

行兼務を拝命したのち、親交があった伊能忠敬（一七四五—一八一八）にあてた手紙が掲載されている。手紙の中で高橋は喜びを隠さなかった。書物奉行を務めるに当たって足高や役扶持が支給され、天文方の仕事もこれまで通りという条件に感謝したばかりではない。幕府の職制で天文方より格上の書物奉行を兼務することで、天文方でも筆頭の地位となり、これまで筆頭だった吉田勇太郎の手前心苦しくてならないとも述べている。

さらに興味深いのは書物奉行の「働き方」について述べたくだりだ。「御書物奉行勤方は甚閑暇にて、同役四人、一日一人つゝ詰番に出申候、夫も朝四つ時に出、八つ時に引き候上、御用向は至て稀にて、種々御書籍拝見は勝手次第故、追々珍書可致拝見と、是のみ難有奉存候」（読みやすいよう片仮名を平仮名に変えるなど原文を若干改めた）。意識すると、「御書物奉行はたいそう暇な役職で、奉行は私を含めて四人。毎日一人ずつ詰め番として出勤しますが、詰め番といっても朝四つ時（午前十時頃）出勤し、八つ時（午後二時頃）には退勤できます。御用を命じられるのは至ってまれで、しかも御文庫の書物は読み放題。いずれ珍書を拝見するつもりです。（職務の中では）これだけが楽しみ。なんともありがたいことです」。

書物奉行は紅葉山文蔵の珍書（貴重書）を自由に閲覧できる。高橋はその理解していたのである。おそらくそれが当時の実情だったのだろう。

高橋景保が書物奉行を拝命した文化十一年二月当時、すでに在職していた書物奉行は、近藤重蔵（四十四歳）、鈴木白藤（四十八歳）そして藤井佐左衛門義知（六十二歳）の三人。うち藤井は翌十二年六月に病気のため辞職し（文化十三年没）、夏目勇次郎成允が後任となる。藤井、夏目はともかく、近藤重蔵、鈴木白藤、高橋景保の三人は当代一流の知識人であり（高橋はすぐれた天文学者であると同時に満州語研究の第一人者だった）、精力的に蔵書を閲覧し書写したに違いない。

近藤と高橋の古書古記録に対するいささかマニアックな嗜好を物語る逸話が『廉斎問話』に載っている。同書は幕臣で漢学者でもあった千阪畿（一七八七—一八六四）の雑録を三村竹清が編集したもので、『日本藝林叢書』第五巻に翻刻され、『紅葉山奉行と書物奉行』にも鈴木白藤の項で採録されている。なぜ白藤の項に。それは語り手が白藤にほかならないからである。読みやすいように意識すると。

私（白藤）が御書物奉行だったとき、幕府の古い文書を収納する長持が破損しているのを見つけ、このままでは鼠が食い荒らすかもしれないと、奥右筆組頭の秋山内記に修復を打診したところ、秋山は「その長持には何が入っているのか」と尋ねた。「元禄頃の諸御書付類（各種公文書）が収められています」と答えると、秋山はしばらく考えたのち、「そもそも鼠に喰われてもかまわないという考えで、その長持に収められたのだろう」と言って（修復の必要を認めなかった）。すると同僚の近藤と高橋は「そんなら盗め」（原文）と、思い思いに中身を持ち帰った。その中には「犬の御書付」（元禄期の犬に関する文書）もあった。

こう語った白藤自身は古い公文書持ち出しの「盗み」に加わらなかったのだろうか。真相は藪の中。いずれにしろ白藤在職当時の書物方の気風、近藤と高橋の性癖が如実にうかがえて興味深い。

本好き故に、研究熱心のあまり、書物奉行の禁止条項（誓詞の箇条）を犯して免職に追い込まれたという推測は、以上のような記録からもうなずける。これとは別に若干気になるのが、潤三郎が『海録』所収の詩中に「風流罪過」とあることなどから「或は筆禍の他に何かあらぬ冤罪を受け

たる如くにも想像せらる」と書いている点である。「風流罪過」の語は『北斎書』循吏伝・郎基の条に「在官写書、亦是風流罪過」とあるに由来するが、この語は次第に男女間の「過失」を意味するようになったという（『百度百科』）。現代中国語においても、「風流」は高雅な趣味というだけでなく男女の情事を意味する表現として用いられている。わが国でも同様で、「風流遊び」は「風流なあそび」のほかに「茶屋遊び」を指し、「風流韻事」にも「色めいた遊び」「好色の道」の意味があった（『日本国語大辞典』）。潤三郎も明言は避けているが、この点を疑ったのではないだろうか。

節約家で博識で書物マニアの白藤のような人物が、色事で幕臣にあるまじき過ちを犯すことなどありえるだろうか。真相は不明だが、白藤の随筆『夢蕉』には、彼がプライベートな生活とりわけ近藤重蔵等との交友の際に芸者を侍らせ酒宴を催した様子が記されているという（市島春城『芸花一夕語』一九二二年刊）。早稲田大学の理事や図書館長、読売新聞の主筆も務めた市島春城こと市島謙吉（一八六〇—一九四四）は、白藤の日記をもとに、近藤が三田に建てた豪壮な別宅兼蔵書庫「擁書城」に白藤らを招いたときの様子を紹介している。要約すると。―近藤は牡蠣飯を振舞うから新橋の芸妓「豊島」を連れてくるよう白藤に注文を出し、白藤らが訪れると、どうみても息子の配偶者としか見えない十八、九歳の美女が現れた。

近藤の妾である。豊島が衣服を着替えると妾は張り合うように黄八丈に着替えた。『御書物方日記』の文化六年（一八〇九）十一月一日の条に近藤から「妾腹女子」の出生届、文化十一年二月十一日の条に「妾腹男子」の出生届がそれぞれ出されたことある。白藤が目撃したのはこの「妾」だろうか。いずれにしろ白藤（そして江西父子）が罰せられた理由は、紅葉山文庫蔵書の書写だけではないのでは、という疑念を払拭できないのである。

『夢蕉』にはほかに興味深い記事があり、白藤免職の経緯にも触れら

れていたと想像されるが、残念ながら一部が宮崎成身『視聽草』（当館蔵）続七集に書写されているほか、現在所在不明である『視聽草』所収の『夢蕉』の内容は、文化から天保にかけて大名や旗本の別荘の庭園等を訪れた記事。詳細は次号で紹介したい。『夢蕉』について森統三は『日本古書通信』で次のように述べている（『森統三著作集』続編第十一巻所収）。

『夢蕉』は勝海舟の遺書の中に何冊かあつたのを、往年森潤三郎さんが見たがつて、いろいろ骨を折られたが、つひに出来ずじまひだつた。

その書は戦後に勝家を出て、それなり行方が知れなくなつた。文理科大学の蔵書目録にも『夢蕉』の何冊か出てゐるが、それも前から不明になつてゐる由だつた。

『夢蕉』はかつて勝海舟の旧蔵書で、潤三郎が勝家に閲覧を希望した
が実現しなかつた（したがつて『紅葉山文庫と書物奉行』では資料として
用いられていない）。勝家所蔵『夢蕉』は戦後散逸して所在不明。ほかに
東京文理科大学（東京高等師範学校の後身で、一九四九年に東京教育大学
に改組）が何冊か所蔵し、蔵書目録にも記載していたが、これまたいつし
か所在が分からなくなつたというのだ。とはいえ文理科大学の蔵書目録に
載つていたくらいだから、閲覧して引用した研究者もいたし、市島のように
随筆的な著書でも取り上げた著者もいた。市島の前掲書は、主に近藤重
蔵（正斎）に関する記事に注目し、『夢蕉』には「正斎に関したことが可
なりあつて、之に依て正斎の詐らざる面目を窺ふ事が出来る」と述べてい
る。

ほかに鈴木貞夫氏は「権楽園―松岡藩下戸塚村抱屋敷」と題する小文を
『新宿歴史よもやま話』（公益社団法人新宿法人会）に連載し、『夢蕉』の

記事を紹介している。権楽園は水戸藩附家老で居館が常陸国松岡にあつた
中山氏の庭園（現在の新宿区西早稲田）。中山備後守信情が文政五年十一
月と同六年四月に「近隣の文武に秀れた人達」を招いたときの様子が『夢
蕉』に記録されているのである。

鈴木白藤が書物奉行当時の書物方の仕事

白藤が書物奉行だつた時期（文化九年十一月から文政四年十二月）の書
物方はどのような業務に従事していただろうか。書物の出納、曝書、修復、
書庫の点検、管理など日常的業務以外の主要な仕事を、『元治増補御書籍
目録』収録の「始末記」（書物方が作成した主要年譜）から抄出してみよう。

- ① 文化十年七月二日「新御庫修理ノ事アリ モト此ノ御庫 半ハ御納
戸庫タリ 今度西庫ノ半ヲ分チテ是レニ換ヘ貴重ノ書ヲ置カント
ヲ進言ス ソノ言フトコロヲ允サル」
- ② 文化十一年八月十五日「京極周防守 サキニ備前守ト称ス 御書目校正
ノ事ヲ諭セラル コレ重訂ノ挙アル始メ也」
- ③ 同二十日「御書目重訂ノ顛末ヲ箋ニ記シテ周防守ヘ言ス」
- ④ 九月十三日「御書籍題号ナラヒニ部類ノ允当ナラサルハ校正シ ナ
ホ林大学頭ト議スヘキ旨周防守達セリ 是ヨリシハシハ大学頭ト会
議シテ論定ス コノ時属吏ノ事ニ習フ者ヲ撰ヒテ従事セシメントラ周防守ニ言ス
ソノ請フトコロヲ可セラル（下略）」
- ⑤ 文化十三年七月八日「御前本・駿府御文庫本等貴重各種ノ目錄ヲ周

防守ニ示ス」

- ⑥ 同二十五日「式部卿殿紀藩ニ入ラル、ニヨリ 四書五経小学近思録（中略）通鑑三大書等副本アルハ査勘スヘキヨシ 老中酒井若狭守達セリ」

- ⑦ 八月二日「先ニ御前本・駿府御文庫本・金沢本等ハ分ケテ貴重アルヘキヨシ書目ヲモテ周防守ヘ進言セシニ マタ来歴ヲ記シテ言スヘキ旨アリ」

- ⑧ 同三日「式部卿殿賜書ノ目錄ヲ査考シテ呈ス」

- ⑨ 同晦日「貴重ノ来歴ヲ書シテ周防守ニ呈ス ノチ貴重トナスヘキヨシヲ命セラル 時ニ慶長活字版ノウチ御庫ニ逸スル者ハ收儲アラシコトヲ言フ ヨリテ慶長活字版ノ始末ヲ言ス」

- ⑩ 文化十四年二月十一日「是ヨリサキ北条本東鑑・慶長活字版・駿府本・享保新写本等顛末ヲ記シテ架ヲ別テ貴重トセンコトヲ請フコヽニオイテ命アリ 東鑑ヲ北条本ト称シ 駿府二十二部ヲ御讓本ト称シ 享保新写本ヲ享保新写校合本ト称シ 金沢本・宋元槧本・慶長活字版ミナ架ヲ別チテ貴重スヘキムネ周防守達セリ」

- ⑪ 四月十五日「御前本・慶長写本・活字版毎種別函ヲ造ランコトヲ周防守ニ言ス」

- ⑫ 十月四日「地理志 享保中旨アリテツトメテ收貯セラル、トコロナリ ソノコト終ニ廃絶ニ及ヘリ ヨリテ長崎奉行へ旨ヲ下シ 今ヨリノチ府州県志舶来毎ニ書目モテ大学頭へ附シ ソノ書ノ有無ヲ照シ收貯セハ逐年全備ニ至ルヘキコトヲ周防守ニ言ス」

- ⑬ 十一月十日「三御庫コトニ オノオノ水盤ヲ置カンコトヲ駿河守へ請フテ コレヲ允セラル」

- ⑭ 文政元年五月六日「星鳳楼帖・響琴斎帖・蘇米鷲羣等ノ帖 罕遘ノモノニシテ先ニ修補スルトコロ 裱装拙劣ナルニヨリテ フタ、ヒソノ職ニ命センコトヲ周防守へ建言ス コレヲ允セラレテ御書物師出雲寺源七郎ニ官金ヲ與ヘテ自宅ニ下シ修補セシム」

- ⑮ 八月七日「御書籍中ノ書帕本及ヒ第本等ノ陋本ヲ芟除シ 正本ノミヲ重訂ノ書目ニ載センコトヲ周防守へ言ス」

- ⑯ 九月十一日「医書・国書ノ目ヲ医学館ノ主事杉本忠温 多紀安長 オヨヒ和学講談所塙保己一ニ下シテ正偽ヲ校勘セシメンコトヲ言ス スナハチ允サル、ニ因リテ書目ヲ致シ ナホ弁シ難キハ忠温等ニ面説シコレヲ定メシム」

- ⑰ 文政二年二月二十一日「御書籍ノ收儲計ルニ 正徳年間四万余冊ソノ、チ続収ノ書既二三万四千冊ニ至リ 旧時ニ比スルニホトント相ヒ倍シ 吏員ハナホ旧ニ依ルヲモテ 今奉行ノ欠ヲ補ハス 属吏ノ員ヲ増サレンコトヲ近江守へ進言ス 後ニ請フトコロヲ允セラレテ五人ヲ増給ス」

『御書物方日記』（以下『日記』とのみ）ほかの記述で右を補足したい。

①の「新御庫」の修理は、閏十一月二十九日に終了し、小普請方から受け取った。新庫はもと納戸倉だったが、修理後は西庫の半分を納戸倉に当て、修理後の新庫を貴重書庫にしたいという書物方の要望が認められた。

②は、紅葉山文庫の目録改訂（「御書目校正」）を、書物方を管轄する若年寄京極周防守（京極高備 丹後峯山藩主）から論達された件。今回で九年寄京極周防守（京極高備 丹後峯山藩主）から論達された件。今回で九年目の改訂で、林述斎の指導の下、作業が始められた。この目録は、文政

十一年（一八二八）に毛利家から漢籍一万八千冊余が献納されたため増補の必要が生じ、結局天保七年（一八三六）にようやく『重訂御書籍目録』として完成する。

③は、目録改訂の「顛末」（完成までの工程）を文書で周防守に示したというもの。これに対して、文言が堅すぎるので「少々やわらげ」再提出するよう指示があり、八月二十七日に改めて差し出した。

④は、『日記』に、九月十三日、周防守が近藤重蔵と高橋作左衛門に書付をもって左のような指示を与えたと記されている。「御書籍之内 題号等認違之品有之 御目録えも其俣認入 部類分等間違候も有之候趣に付何も申合 校正可被致候 尤林大学頭えも可被申談候事」。現在の目録には、書名や分類を間違えた書物もある。林大学頭（述斎）とも相談して、誤りを改めて目録を編集せよというのである。九月十六日には、木下伊右衛門ほか五名の書物同心が「御書目并御書籍題号等認違之御品校正懸り」に任命され、彼らには手当も支給された。「御書物校正」の作業は、毎回書庫から書物を役所（書物方の執務室）に運んで行われた。このため移動が困難で書物を傷める可能性がある天気（激しい雨や雪）の日は延期された。

⑤に関して『日記』七月八日の条に「御文庫御書物取扱方奉伺候書付」「御本取扱并名目之覚」「御本目録」「御前本に准し取扱可申品之覚」の四通を袋に入れ、書物奉行四人全員で京極周防守に差し上げたのである。すなわち書物奉行からの建言で、福井保『紅葉山文庫』には、四通の内容がそれぞれ次のように解説されている。

「文庫蔵書のうち、特別な貴重書と、無益不要の図書とを区別し、軽重に応じた取扱をすべきであるという意見書」「特別貴重書の種類お

よびその名称についての意見書」「貴重書の目録（のち『楓山貴重書目』と題して伝写したものがそれであろう）」「歴代將軍の手沢本（これを御前本という）に準じて取扱うべき貴重書の目録」

貴重書とは、「御前本」のほか「駿府御文庫本」（家康が駿府の文庫に収蔵していた書物）「金沢本」（金沢文庫旧蔵書）ほかである。

⑥と⑧は、十一代將軍家斉の子で同年六月に十六歳で和歌山藩主徳川治宝の息女の婿となった「式部卿」（名は斉順。文政七年に和歌山藩主となる）が持参する書物について、老中酒井若狭守から指示があった件。酒井は御文庫に複数部ある書物は、うち一部を式部卿に持参させ、一部もない場合は買い上げるよう指示した。

⑦は、七月に建言した⑤「貴重書について、それぞれの来歴を詳しく調べて申し上げよう周防守から指示があったということ。周防守は、貴重書の扱いについて、「御前本」は今後粗略な扱いがないよう入念に保存し、しかしたとえ権現様（家康）の手沢本であっても、取り扱いの際に身を清める必要はない（「権現様御前本にても 清め候て取扱候には不及候」と指示している）。

⑨は、周防守の指示を受けて貴重書の来歴を調査して差し出したというもの。提出したのは、「御前本之儀に付奉伺候書付」「御前本目録」「御代々様御前本全備候様仕度心附候儀申上候書付」（歴代將軍の手沢本をすべて文庫に備えたいという建言）の三通。あわせて「植字版」（家康が活字で出版させた慶長活字版）数種のうち紅葉山文庫に収蔵がない書を補充すべき旨を建言。その際、三種の慶長活字版『東鑑』『七書』『貞観政要』も差し出した。

その後、十一月六日、近藤に対して、近藤が所蔵する「慶長植字版」（慶長活字版）三部（『東鑑』『七書』『貞観政要』）を御用につき差し上げるよう周防守から直に仰せがあり（献上）。十二月三日、近藤に銀二十枚が下され、同十一日、三部とも文庫に収められた。

⑩前年の冬に慶長活字版・金沢文庫本ほか貴重書の取り扱い等について伺を周防守に差し出したところ、この日（二月十一日）、以下のような指示あり（一部省略）。―古写本の北条家旧蔵『東鑑』『吾妻鏡』は「北条本」と唱え、別段の扱いをすべし（特に丁重に扱うように）。「駿府御譲御本」二十二部は「駿府御譲御本」と唱え、「慶長新写本」三十一部は「慶長御写本」と唱えよ。「享保新写校本御本」（享保期に新たに補写された写本）は来歴の調査に止め貴重書として別段の取り扱いはしない。「金沢文庫本」は「御前本」に準じた扱いにする必要はない。「古写本」「宋元板」同様、別段入念に扱うべし。「慶長活字板本」は「慶長植字板」と唱え、「御前本」に準じて扱う必要はない。別段入念に扱うだけでよい。

⑪「御前本」「慶長御写本」「慶長植字板」（慶長古活字本）を別置するために新たに書箱を新調することを言上。八月八日の『日記』に、「慶長植字板御本」「御譲御本」「金沢本」等の新しい箱（「新規御筥」と修繕済みの箱、計二十三箱を細工所で受け取った旨記述あり）。

なお現在当館が保存する書箱のうち、蓋の裏に「文化十一年甲戌十二月近藤重蔵 鈴木岩次郎 藤井佐左衛門 高橋作左衛門」と墨書されたものが数点存在する。文化十一年十二月六日の『日記』に「御書物筥筒式十八致出来候間 今日受取候様 御細工所より申越」とある書箱（御書物筥筒）であろう。ちなみに書物方は三十箱の新調を求めたが目付の指示で二十八箱に減らされた。細工所から連絡があったのは六日の八つ時（午後二時頃）過ぎだったので、翌七日に細工所から受け取っている。これらの

箱は新収書籍を収納するためのもので、七月十九の『日記』に「新規御預ケ相増候に付 御書物箱三拾御細工頭へ御断 御勝手御用番駿河守殿へ申立 丹阿弥を以 岩次郎差出之」とある。近藤以下書物奉行が上層部に積極的に働きかけ、蔵書が増加する中（⑩）、書物をより良く保存するための書箱新調を実現した経緯がうかがえる。四人の名を蓋裏に記したのはみずからの功績を永く伝えるためだろう。

⑫幕府は享保期に將軍吉宗の指示で中国各地の地方志（地理志）を積極的に蒐集したが、その後蒐集が中断していた。そこで今後長崎奉行に命じて、中国船が舶載した地方志類のリストを大学頭に提出させ、紅葉山文庫が所蔵していないものを取り寄せ、中国地方志が全備するように計らうべき旨を周防守に言上した。同日の『日記』には「御書物之内 地理志之内府州県志類速全備仕候様申上候書付」を周防守に差し出したとある。この日、詰め番の書物奉行は近藤重蔵で、近藤の提案であったことがうかがえる。この件につき、十二月七日の『日記』に近藤が「清国地志収否検目」を書物方の役所に差し出した旨が記されている。「検目」を書物奉行全員で評議するためである（「検目」は翌文化十五年二月二十七日に校合を終え、近藤が一覧のため自宅に持ち帰っている）。

「清国地志検目」は「紅葉山文庫既収未収の別を記した書目の凡例」（福井保『江戸幕府編纂物』）で、その写は書物を通じて近藤と交際があった大田南畝の随筆『一話一言』にも収められている。なぜこの時期に中国地方志類の蒐集計画が立てられたのか。福井は当時、中国地方志（府州県志類）から物産関係の記事を抄出する作業が行われたことを挙げている。立案者は林大学頭述斎と思われ、幕府儒官の成島邦之助司直が中心になり、紅葉山文庫から取り寄せた地方志から記事を抜き出す作業は昌平坂学問所の学生たちと推測されるという。目的については、「我が国の産業政策あ

るいは採葉、医学の面における参考資料の整備が目的であろうと推測される」と。作業の成果は当館蔵『地志物産部』全百四十六冊（昌平坂学問所編。請求番号 二九一—〇〇六四）にまとめられた。『日記』にも成島への地方志物産部貸し出しの記事が頻繁に見られ、地方志蒐集および「清国地志検目」作成との密接な関係がうかがえる。

⑬と⑭は、書庫の防火対策の建言と蔵書修復の件。⑬の「駿河守」は若年寄の植村駿河守家長。

⑮は、目録の校正（改訂）に当たって、「陋本」を除き「正本」のみを目録に載せたい旨を周防守に言上した件。文中にある「書帙本」とは、明代に作成された古書の複製で、主として贈答用で校正が不正確なものを指す。このような「陋本」は目録から削除したいというのである。

⑯は、目録の校正にあたって、医書や和書など漢学以外の書籍は、それぞれの専門家に書籍の本文の異同を比較研究させ、その真贋を鑑定させた旨言上したというもの。医書については医学館の杉本忠温と多紀安長。和書については和学講談所の塙保己一の名を挙げている。書物方の提案は直ちに認可された。

『日記』によれば、これより先、和書と医書の目録校正のため前記の三人に御文庫で調査させたい旨の願書が出されたが（四月十二日）、六月十八日、周防守から三人を御蔵（書庫）に入れてはならない旨が達せられた。しかし⑯（九月十一日）以降は、三人は目録校正のアドヴァイザーとして書物方の問い合わせに回答するようになったようである。

文政二年二月三日、近藤重蔵が大坂弓矢奉行拝命。⑰は、蔵書の増加に伴い実務に当たる書物同心（「属吏」）が五人増員されたというもの。かわりに近藤が抜けたあと書物奉行の後任は任命されなかった。閏四月十日の『日記』に根岸忠太ほか増員された書物同心五人の名が記されている。

以上のほか、城絵図、国絵図の調査等々、この時期の書物方は、近藤を中心に目録改訂とあわせて蔵書とりわけ各種貴重書の調査や保存方法の改善を着実に実施した。文化十四年八月十五日の『日記』に「下り御本并新規御預御本共日記へ明細に相記可然奉存候」と近藤が書いているのもその一つ。従来は返納本や新収本について「新規御本幾部」としか記していないが、以後は「明細に相記し候様可然奉存候」というのである。

近藤は個人的にも文化十四年十二月二十二日に紅葉山文庫の貴重書の考証や歴代將軍の文事をまとめた著述（「御本日記附録」「御本日記続録」「御写本譜」「御代々御文事表」「御代々御詩歌」の十冊一帙）を献上するなど、精力的に働いている。

鈴木白藤の書物奉行としての仕事ぶりは近藤ほど精力的ではないが（すくなくとも『日記』ほかの記録からはそう言わざるをえない）、白藤の歴史や書籍についての幅広い知識が、近藤の目立った業績の陰で、目録改訂、貴重書目録の作成ほか書物方の研究調査業務を支えたことは容易に察せられる。

森潤三郎が『蔵書家白藤として知られたる書物奉行鈴木岩次郎成恭の事蹟』で紹介した『楓山書倉邸抄』は、浅野梅堂の旧蔵書で、浅野から蔵書家中川德基の手を経て、潤三郎が閲覧した当時は歴史学者幸田成友の所蔵だった。幸田は潤三郎が借覧を請うと快く承諾したという。ところで同書の巻尾に浅野は次の識語を記している。「此書は鈴木岩次郎白藤先生の手書にして近藤守重が有文故事（氏家註・「有文」は「右文」の誤り）を編書せし藍本なり。右文故事は塾生の手になりて守重は監閲せしのみなれば此書に抵触せしところあるなり」。白藤が『楓山書倉邸抄』を書写したのは文化十二年四月八日。この書が「藍本」（底本）になって近藤の『右文故事』（紅葉山文庫の貴重書の考証等）が編まれたという意味だろうか。『楓

山書倉邸抄』と『右文故事』に異同が見られるのは、近藤が自著の清書を塾生に任せたからだとも。白藤が近藤の研究調査をどの程度サポートしたのかは定かでないが、すくなくとも浅野は白藤の協力がすくなくなかったと推測している。

参考資料 『楓山貴重書目』（翻刻）

参考資料として、当館所蔵の『楓山貴重書目』（請求番号 二一九〇一九四）の翻刻全文を当館ホームページ掲載『北の丸』第五一号にPDFファイルで公開する。

『楓山貴重書目』は埴氏温故堂文庫旧蔵（全一冊。写）。近藤重蔵が中心になって作成した紅葉山文庫の貴重書目録である。文化十四年十一月冬至の近藤守重（重蔵）の「題辞」に「今後進ノ僚属ノ為ニ貴重書目ヲ作りテ」とあり、今後書物方の奉行や同心を務める者たちが容易に参考にできるように作成した経緯が知られる。かつて『温故堂廿四種』（明治十五年、浦井信膳写）に項目のみ翻刻されたが、全文翻刻は今回が初めて。内容的に『右文故事』など近藤の他の著述と重複する部分も多いが、書物方の後進の調査や検索の便を配慮し簡潔に記されているところが特長である。しかし記述の誤記も見られる。とりあえず誤記と判明した箇所は、「*」を附してこれを改めた。

（専門調査員）